

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【与野八幡小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	本年度、紙とデジタルのそれぞれの良さを生かして、児童の知識・技能の定着に向けた取組を実施することができた。基本的には次年度もこの形で取組を継続していくことで児童の学びを保障していく。児童の1人1台端末がiPadに変わることによる変化とその対応について、児童はもちろん教員にも負担が生じると考える。学校DX推進部と学校課題研究を生かし、その困り感を組織的に支えていくことでICT活用の推進に遅れが生じないように取り組んでいきたい。また次年度から指導訪問の形式が大きく変化する。これまでの機会と捉え、本年度実施した学校課題研究のシステムとうまく融合させることで、年度内の中期的な視点をもって教職員の授業力向上につなげていく。そしてその結果を児童の知識・技能の習得に還元できるように取り組んでいく。
思考・判断・表現	来年度も「自律的に学ぶことができる児童」の育成のために引き続き取り組んでいく。本年度まで取り組んできた、学び方を自分で決める、協働的な視点に立つてお互いの考えを共有し対話して深める、表現方法を自分で決めてまとめるなど、児童の思考力・判断力・表現力を高めるための授業づくりを継続していきたい。また、ルーブリック評価の積極的な活用と表現することに対する児童の意識改革も継続して進めていきたいと考える。これらのために特に重視するのは、カリキュラム・マネジメントの視点である。本年度は2学期から月に1回「カリマネ部会」を設定し、デザインマップの修正を繰り返してきた。来年度はこの蓄積を生かし、児童が身に付けた学力等を向上・活用できるように、より教科横断的な視点に立つて授業をデザインできるようにしていきたい。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<p><学習上の課題> 国語「言葉の特徴や使い方に関する事項」 算数「数と計算」変化と関係 <指導上の課題> 個人差が大きい。個に応じた指導を充実させ、児童の自律的な学びを促していく必要がある。また、日常に生かす視点をもった指導をしていく必要がある。</p>	<p>書き込み式ドリルやドリルパークを活用して、反復・習熟の機会を保障し、一人ひとりの課題に合った学習を進めていくことができるよう指導する【週に3度】 習得した学習内容を日常生活とどのように関連しているのか、どのような活用場面があるのかを、児童と共に考え、共有する【単元ごと】 1人1台端末を活用し、児童の振り返り等を基に「さいたま市『アクティブ・ラーニング』型授業」、学びのポイント「し・しゃ・く」を意識した児童主体の授業を実施し、成果と課題を共有する。【学期に1回】</p>
思考・判断・表現	<p><学習上の課題> 国語「話すこと・聞くこと」「書くこと」 算数「変化と関係」「データの活用」 <指導上の課題> 個人差が大きい。個に応じた指導を充実させ、児童の自律的な学びを促していく必要がある。児童が学んだことを主体的に表現する機会を設定していく必要がある。</p>	<p>スクールタッチボードを活用し、児童が自身の学びを振り返る時間を設定する【毎時間】 ルーブリック評価を取り入れ、児童が学習のめあてを自己決定して、主体的に学習に取り組むことができるようにする【毎時間】 ねらいを明確にした協働的な学びの場面を設定し、仲間と考えを交流する中で学びをさらに深めることができるようにする【単元ごと】 自分の考えや学んだ成果を児童が表現する機会を設定する【単元ごと】</p>

全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
<小6・中3>(4月~5月)

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	A	<p>年間を通して、書き込み式ドリルやドリルパークを活用した反復・習熟の機会を保障し、一人ひとりの課題に合った学習を進めていくことができた。また質問項目47で授業で学んだことを、ほかの学習で生かしていますかに対し、多くの学年で市平均を上回る結果が出ており、身に付けた知識・技能を他の場面で活用できる力が身に付いてきていると考えられる。今後日常生活での活用まで広げていくために、児童が考えをきっかけを教員が引き続き投げかけることを継続していく。1人1台端末を活用した「さいたま市『アクティブ・ラーニング』型授業」、学びのポイント「し・しゃ・く」を意識した児童主体の授業を全教職員が実践し、公開・協働した。学校課題研究と関連させて、複数のキャリア段階が混在するチームを作り、①授業内容の相談・検討②実践授業の公開・参観③振り返りと協議を1セットにして取り組んだことで年次に関係なく、学びを深めることができ、その成果を児童の学びに還元することができた。</p>
思考・判断・表現	A	<p>スクールタッチボードを活用し、児童の様々な情報を取得し、それを学びの中に生かすことが継続できた。授業の振り返りについては、校内にスクールタッチボード以外のフォーマットを活用してより児童の実態を適切に把握しやすくなり、それも共有することで、児童の学びを深めることにつながったと考える。今年度は、ルーブリック評価を取り入れた授業実践が確実に増加し、児童が学習のめあてを自己決定して、主体的に学習に取り組むことができた。また、ねらいを明確にした協働的な学びの場面を設定し、仲間との対話を生かして学習する中で学びをさらに深めることができた。加えて今年度は児童の表現することの定義についても働きかけた。アンケート結果と教員の見取りを基に、「自分の考えを表現する=声に出して発表する」となりがちだったという課題を見出し、「表現方法に様々な働きかけ、それを適切に選択することが大切だ」というメッセージを伝えることで、児童の表現力への自己肯定感を向上させることができた。これらについては質問項目39~41などでその成果を確認できた。</p>

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	<p>3教科ほぼ全ての項目で埼玉県・全国の平均正答率を上回った。国語「情報の扱い方に関する事項」においては、一部課題がみられた。質問と設問がどのように関係しているかを判断できるように学習を進めていく。算数では「数と計算」(測定)の領域において一部課題がみられた。数直線上の目盛りを取って分数で示したり、示されたはりの目盛りを正しく読んだりする問題の正答率が低く、理解を促すことと意識させた。理科では身の回りにおける金属の性質についての正答率が低かった。知識を習得するだけでなく、日常生活での体験と関連付けて生き生きとした知識にできるような指導を工夫していく。R7全国学力・学習状況調査の児童質問「分らないことやよくわからないことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫するまでできていますか?」(学習)の内容に対して、分かった点や、よく分かった点を見出し、次の学習につなげることでできていますか?に対する肯定的な回答の割合が非常に高い。児童が学んだことを主体的に表現する機会を設定していく必要がある。児童の主体性をさらに引き出し、学びがファシリテートできるよう、教員も授業方法や指導法をさらに工夫する必要がある。</p>
思考・判断・表現	<p>3教科ほぼ全ての項目で埼玉県・全国の平均正答率を上回った。国語「書くこと」においては、一部課題がみられた。自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する力の向上を目指す。算数では「数と計算」(データの活用)の領域において一部課題がみられた。共通する単位分数を理解して分数の加法を行う力や目的に応じた適切な資料を選択し、それを基に論理的に答えを記述する力の向上に努めていく必要がある。理科では、実験結果を基に結論を導く理由を記述する問題や、問題を解決するための観察・実験が適切かどうかを検討する問題に一部課題があった。今後、授業において、児童が自分の言葉を用いて取り組んでいるようにし、力を向上させていく。R7全国学力・学習状況調査の児童質問「学校の友達との間で話し合ふ活動を通して、自分の考えをまとめ、新たな考え方に気づいたりすることかできていますか?」(授業や放課後)の考えを大切にして、お互いに助けあふ関係の構築に取り組んでいきますか?に対する肯定的な回答の割合が非常に高い。児童が学習において、協働的な学びを日常的に実践し、様々な課題を協力しながら解決できているといえる。質問調査から、児童がICT機器活用で自信をもっていることも分かった。様々な表現方法やツールを活用して、今後も思考力・判断力・表現力の向上に努めていく。</p>

①結果分析(管理職・学年主任等)
②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	<p>全体で見ると、市平均を上回った項目が多かった。社会・理科においては全項目市平均を上回っており、知識・技能が定着していることが伺える。国語では市平均を上回った学年は1つのみであった。解答類型を見ると、「主語と述語を正しく捉える問題」や「適切な修飾語を選ぶ問題」において課題がみられた。どちらでも教科書で小学生として扱っている部分であり、児童が覚えなければならぬことというイメージで学習している可能性もある。学校課題研究を通して、児童が自己決定する場面、時間を確保する授業実践が増加していることから、教員の「自律的に学べる児童を育成していく」という意識が確実に高まってきているといえる。小単元においても同じ意識が実践していくことが今後重要になっていくと考える。算数では3つの学年で市平均を上回った。全体としてよく身に付いていたが、解答類型で課題が見られたのは図形領域である。ICTを活用した学びと相性がよく、本校でも積極的に取り入れられているが、厚紙で立方体を製作する活動や分度器を使った図形の角度を測る活動などの体験的学習も十分保証していくことで、さらに知識・技能を習得できるように働きかけていく。</p>
思考・判断・表現	<p>全体で見ると、市平均を上回った項目が多かった。社会・理科においては全項目市平均を上回っており、両教科における見方・考え方が定着していることが伺える。国語では全学年で市平均を上回った。学び方を自分で決める、協働的な視点に立つてお互いの考えを共有し対話して深める、表現方法を自分で決めてまとめるなど、学校として取り組んできた「自律的に学習する児童」の育成に向けた取組の成果であると考えられる。算数では3つの学年で市平均を上回った。全体的によくできていたが、解答類型で課題が見られたのはグラフの読み取り、与えられた状況からの立式などであった。どちらも自分で情報を正しくつかみ、それを生かしながら学んだことが生かせることを児童に認識させると共に、教員もそういった教科横断的な視点をもって児童の指導に当たるよう取り組んでいくことを共通理解し、教科指導を推進していく。</p>

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

③	中間期報告 (実態把握)		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	<p>書き込み式ドリルやドリルパークを活用して、反復・習熟の機会を保障し、一人ひとりの課題に合った学習を進めていくことができるよう指導する【週に3度】 習得した学習内容を日常生活とどのように関連しているのか、どのような活用場面があるのかを、教師が投げかけ、児童と共に考える場が増えてきている。学年や教科による差が生じている課題は残る。 1人1台端末を活用し、児童の振り返り等を基に「さいたま市『アクティブ・ラーニング』型授業」、学びのポイント「し・しゃ・く」を意識した児童主体の授業の実践が増えてきている。成果と課題の共有について課題が残るが、学校課題研究と関連させて、2学期以降、取組を推進していく。</p>	変更なし
思考・判断・表現	B	<p>スクールタッチボードを活用し、児童が自身の学びを振り返る時間を設定するごとに課題が残る。少しずつスクールタッチボードを活用した振り返りに移行中である。ルーブリック評価を取り入れた授業実践が増えてきて、児童が学習のめあてを自己決定して、主体的に学習に取り組むことができる。ねらいを明確にした協働的な学びの場面を設定し、仲間と考えを交流する中で学びをさらに深めることができる。自分の考えや学んだ成果を児童が表現する機会を設定することができる。</p>	変更なし